

「やまがた観光まちづくり塾」 in 庄内 8/26 (土)

【レクチャー】

アドバイザー：宮城俊作（奈良女子大学教授等 平等院参与 ランドスケープアーキテクト）
場 所：「致道博物館」内御隠殿

「街」が観光の対象となっている～近年の京都観光から～

- ・京都文化の中では、洛中から洛外に出ることが観光となっていた。（観光が日常生活の一部になっていた）＝洛中洛外図より＝
- ・今、京都の人のライフスタイルが注目されている（京都人そのものへの興味の増大）。また、観光客の観光スタイルが変化している。（特に京都に来る観光客）
- ・2001.9.11のテロ事件の発生により、海外への観光客が京都へ流れてきた。そしてその流れがいま現在も続いている状態。
- ・情報の多様化により、いままで観光という立場になかったお茶屋遊びなどに訪れる女性客が増えており、また地元の人しか行かないような小さな裏路地まで客はやってくる状況が生まれている。
- ・名所・旧跡をめぐる観光から、体験・廻遊へ。寺・神社 町のすみずみまでが対象になっている。
- ・どの季節でも観光として売るのがあり、観光シーズンという概念がなくなっている（観光シーズンの有名無実化）。冬の京都は特に人気が高い。
- ・リピーターも増えている。京都観光文化検定試験というものがあ、京都の人だけでなく、日本中の人を受けている。試験内容はかなりマニアックなもの。

ライフスタイルが表出する街並み～非日常の中に日常を～

- ・明治初期に建てられた和風建物（家や蔵）で、誰も使わなくなった建物を利用し、フレンチレストランとして活用（畳の上にテーブル）し、好評を得ている。
- ・町屋の証券化の動きもある。
- ・同じように使わなくなった建物を活用し、賃借契約による宿として提供。『ウィークリー町屋「マンション」』（賃借契約によるものだと、旅館業法の取り扱いではなくなるので、施設もほとんどあるがままに再利用できる。）ビジネスホテルとは異なり部屋数もあり、数家族で利用できるというもの。京都の人の住環境を体感できるということが売りとなっている。発想の良さ。
- ・観光施設と言えば観光客で賑わうものであるが、京都街中の施設（カフェ等）は、地元住民が利用する（平日などは客の7割が地元住民：普段着の施設となっている）。地域住民が使う＝観光客も使う。地域住民が使わない＝観光客も使わない。

ある街のとりくみ～生活観光都市への試み～（京都宇治市）

- ・都市景観が損なわれてきている。それには都市計画における行政のイメージ不足もある。平等院は平成16年に世界に遺産登録された。同じ年に高層マンションの建設許可が行われた。行政の想像力不足・都市計画制度の不備により世界遺産登録直後に景観破壊（高層マンションによる）が行われた。
- ・高層マンション自体が悪いのではないが、高層マンションまでに視点を妨げる高台などが無く、高層マンションが丸見えになっている。これにより平等院から見た景観が損なわれる。
- ・京都ではそのような景観問題が多々発生したが、今後繰り返すことのないように宇治市では景観行政団体となり、住民の意識調査等を行い景観条例の制定へこぎつけた。（これまで建物の高さ制限の無かった地域は新たに制限を指定し、これまであった地区はさらに高さ制限を厳しくした。）既存の高層アパートも高さを削減することも盛り込んだ。
- ・平等院の宝物館の建設では、床面積の確保と視点を確保するため、地下構造とした。また、柱などの間隔は平等院の縮尺を取り入れたものとしている。内から外への視点を意識している。
- ・宝物館のショップでは、なるべく日常生活で使うことのできる商品開発に心がけている。その売り上げだけで、ミュージアムの維持経費が賄えている。（風呂敷など、常に使うということは、その施設の記憶を留めるということ。リピーターの増加につながる）

景観づくりの基本原則～何処にも共通する事項～

- ・街並みにふさわしくないものは規制し、除去する。どこから見る景観がすばらしいのか、バランスを考えたうえで整備する必要がある。
- ・最近の観光のスタイルへの対応が重要(名所・旧跡の既存施設観光から体験・廻遊型となっている。)である。
- ・守るだけから、新たな価値を創造すること。
- ・新しいものを作ろうとする時のために規制・除去することと、望ましい将来像へ向けての地域の合意形成、その価値を評価するシステムを構築していくことが重要である。(地元住民も取り込んで、景観に対するちから・能力を高めていくこと)

宮城教授から見た酒田市・鶴岡市

酒田市

道路に立ててあるのぼり旗：のぼりそのものは悪くないが、デザインが問題

酒田市役所前駐車場：殺風景でスーパー・パンチンコ店の駐車場の様な感じを受ける。緑化等検討必要。

百貨店(清水屋)：建物のデザインが悪い、壁面が広くもったいない。

酒田市内の街中の衰退(シャッター通)：生活感がない。人が住んでいないのではないか。夜も町を見守る人がいなければダメ。

本間邸店前の駐車スペース：もっときれいにできないか？

商店街の通に中央分離帯：商店街の魅力とは道を自由に行きすることが出来ること。

山居倉庫付近の街並み：川沿いのプロムナードはきれいだが、川に向かって建物が背を向けている。住宅等建物の景観が良くない。川辺の館から見た山居倉庫はいい。

夢の倶楽：商品陳列方法を変えればもっとよくなる。

本間美術館及び庭園：入口が駐車場で庭園のすばらしさが伝わらない。

本間家旧別邸：本間家旧別邸もお庭もすがらしいので、もったいない。

鶴岡市

市役所前：電線の地中化・ガードレールがないことすばらしい。交番の看板が悪い。

川沿いの手すり：手の触れるところは木、その他の部分は鋳物というのはすばらしい。

橋のデザイン：力のいれどころ間違っているのでは？気持ちはわかるが良くない。(波模様)

街中のアーケード：雨にあたらぬような作りになっているのはいいが、看板等余計なものまである。緑も固定花壇ではなく、可動式のほうがいい。

【ディスカッション】 湯野浜温泉「亀や」

塾長あいさつ

乾杯（庄内町）

まちあるきの感想（他地区からの意見）

馬場氏（置賜地区）

酒田市：まちの歴史を生かして、定番のところはしっかり整備されていると感じた。

酒田大火による新興住宅地をどうやって活性化させたら良いのかと思った。

鶴岡市：生活のにおいがする裏街道を通ったときに、地元の人たちの良さを感じ、好感を持った。

古いものなど、まだまだ手をつけていないものがあるが、手をかけることによってただ人が来ることが良いことなのかどうか悩んでいる。

塾長からどちらのまちが好きか問われ、「鶴岡市」

佐々木氏（村山地区）

酒田市：海運文化が良かったし、良く見えるような整備がされていると感じた。

まちなかの石畳（通称：本間通）が良かった。

鳥海山をもっと生かしたまちづくりが出来ればよいのではないか。

（どのように行けばきれいな鳥海山が見えるのか案内等がない）

鶴岡市：文化・文学のまちという色が強く感じた。強みがあるのはいいが、それを生かしたパンフレットがないのが残念。

交通、特に接続交通が大切だと感じた。

塾長からどちらのまちが好きか問われ、「酒田市」

佐々木氏見解：地元の人が戸惑うような観光地づくりはやめて欲しい（雰囲気やハートを壊さないように）

宮城教授

「観光が地域にマイナスに作用する」という考えは古い。例えば京都でも4割の観光客が地域住民に同化しようとしている。そういう人が来るようにしないと。地域の力が問われている。地域も地元住民も変わらないと観光客は来ない時代になっている。（観光客が訪れやすい環境を作ることが重要である）

後藤副知事

かつてあってように、「一時に大型バスで大量に観光客が来訪し、ワーと観光地を見て、温泉に泊まって宴会して帰る。」というイメージから脱却する必要がある。量だけ目指すのではなく、あこがれられる質の高さを見せていかないと持続しない。そのための魅力を発掘し発信する必要がある。一方で、観光客が地域の魅力を発掘したり、育てたりしてくれる面もあり、外に閉ざされないオープンな地域を目指すべきである。

庄内地区の観光について

酒田建築士会青年部

酒田は以前、ドラマ「おしん」の影響による観光客があった。お客を呼ぶことを考えた時、「酒田さくんなちゃ（来るな）」という逆の発想から入った。無理をして呼ぼうとせず、なつかしさや、昔の酒田に来たいと思ってもらえるような活動することもひとつのホスピタリティかもしれない。

・いまの酒田になにがたりないのか？課題はなにか？（塾長の質問）

西村氏（酒田市）

観光というのはやはり旅館がリードすべきであり、そういう思いが強いが、酒田はビジネスホテルが多く旅館が少ないのが問題ではないか？

（三菱総研：小松氏）

やはり観光は量の問題である。いかに集客を増やすかが問題である。酒田の良い時期は、江戸時代の北前船の時代であり、その時代の酒田には輝きがあった。

村山氏（鶴岡市）

酒田市は観光ルートが整っていて山居倉庫などは本当に素晴らしい。うらやましいことばかりである。鶴岡はもてなしの気持ちが足りないのではないか？（今日のまちあるきに関して、酒田はアイスやジュースを無料で準備していた。逆に言うところがあるがままの生の土地ということである）

が・・・鶴岡の市内観光は市全体の10分の1以下である(いい資源があるのに)。こういった点からももてなしの心が足りないことが分かる。酒田はそういった良い資源を生かす観光を行っている。

秋山氏 (YKKAP)

酒田のルートは見やすく良いが、画一化されていて、つまらない。(想像できてしまうまちづくりになっている。) さらにシャッター通はなんとかしなければならない。逆に鶴岡は発展途上であり、やり方を変えれば良くなるのではないかと両市に言えることは、川を生かしたまちづくりを考えるべきである。

庄内地区全体に対しての意見

佐藤氏 (庄内町)

酒田市、鶴岡市それぞれのことばかりでなく、お互いが庄内地区としてまとめればよいのではないかと?なぜ致道博物館から本間美術館を結ぶ巡回バスがなぜできないのか?お互いが牽制しあっているような状況であれば、庄内町が庄内地区をリードしていくか。

最後に

宮城教授

現在の観光は訪れるまちに人の生活のにおいがしないとダメである。においがしなければ(ただ見る観光では)リピーターにつながらない。観光というと、観光資源だけを見てしまいがちだが、それだけでは限界がある。いま京都を訪れる人は京都人になりたくて来ているという傾向がある。山村でも中山間でも一緒。

また、現在の情報化により、いままでは考えられなかったような状況も起きている。

(例えば、中国人(人前で肌を見せることを良しとしない民族)は温泉に行かないだろうという勝手な認識があったが、今温泉街を訪れる観光客はかなり増えている)

観光そのものが変わってきている。

【交流会】 場所：湯野浜温泉「亀や」 主な意見

佐藤氏 (酒田市)

「必要とされるまちづくり」を行っていききたい。遊佐町では精神病や認知症の方に森林医療を行っている。医療と健康づくりで防風林のウォーキングなど、その人にとって無くてはならないもの、必要とされるもので出来ることをやっていきたい。

山口氏 (天童市)

庄内では、観光業に携わっていない人が頑張っている。地域の人と観光産業が手を結ぶことはとても大切なこと。観光自体を純粋に楽しむ人を作っていけるよう頑張りたい。

川口塾長

「生活感のある」というのが一つのキーワード。これまでは「観光地」、「観光」という仮面をつくってきたが、これは賞味期限が終わっている。仮面を脱ぎ捨てて、素顔を出す。住みたいと思うようなまちづくりが必要になっている。

宮城教授

京都は平安時代の環境を現代で感じてもらうこと。言葉ではなく場で示すことが大切。

- ・情報が誤った使われ方をする。広報はとても大切であり、庄内全体をとらえて考えいくのがいい。
- ・物事は戦略的にやっていくことが大切。
- ・旭川動物園は広報がとても上手。変なイメージづくりはマイナス。
- ・酒田、鶴岡とも原石としてはすばらしいものがある。磨いていくことが大切。

「やまがた観光まちづくり塾」 in 庄内 8/27(日)

講演：本間万紀子 「本間美術館」内 本間家旧別邸2階

・ここは昭和天皇が泊まった部屋。灯りは「紙」,「石英」,「貝」など使ったもので、飽きさせない心遣い、さりげないおもてなしがある。

・酒田にもすばらしいものがある。酒井家と本間家は災害などがあれば、「粥だし」を共同で行っていた。傘鉾は今夢の蔵に置かれている。元々は本間家の三代目が京の祇園祭りのような祭りをすれば、まちに活気が生まれ、栄えるのではと考え、京都の職員に作らせたものである。戦争をはさんで、昭和40年に復活したが、酒田大火以来、中止されてきた。酒田市政70周年にむけ2年間をかけて復元されたものである。戦争で辞めてしまったことが多い。

・お雛様はかつて、男性は見向きもしなかったが、最近は男性も見ようになってきた。二都物語とまで言われるようになった。これも少しずつやってきて、人の力を借りて大きくしてきたもの。「歴史のひもがとかれていく。」

・守り、築いてきた先人の知恵を伝えること。先人の言葉を子供達に伝える役割があると考えている。

【ディスカッション・交流会の続き】

太田氏(遊佐町)

他人から好かれるためには、他人を好きになる必要がある。交流と連携、交流の仕方を模索中ではないかと思う。

菅原補佐(庄内総合支庁)

庄内というくりで仕事をしている。今回の塾では、酒田の計画は「大きくくり」、鶴岡は「緻密」なスケジュールと、お互いにいいものがあった。

PR以前に、若い人達が生活感のある地域づくりを行って、それを情報提供することが大切なかと感じた。

渡部氏(酒田建築士会青年部)

・景観をつくるにあたって重要なもの。「童夢」という看板が悪いのではない。ここから見るとそう思うだけである。行政のスピーカー不足もあるが、伝えていくことも必要。土地を貸す人、作る人。酒田市は酒田らしい独自のものが必要と考える。

・酒田が大好きである。牛渡川に行ったことがある。とても水が冷たいがきれいだ。好きになること、そしてよく知ることが大切。見ているよりも行動することが大切。自分で楽しむことが大切であると思う。

・酒田大火以来、防火地域ということになり、木造の建物を作りたいと思っているが、思うようにいかない。防火地域の制限を強めるよりも、市民の防災意識を高める方が必要ではないか。

・伝えたいまち、連れてきたいまちをつくっていききたい。

宮田氏(酒田河川国道事務所所長)

日本海沿岸道路は計画の3割が完成している。温海~鶴岡間の25キロは直轄方式による工事を行っている。直轄だけに無料で供用される。観光だけでなく、物流への効果は高いと期待される。

景観法関係では酒田市、鶴岡市とも景観行政団体となっており、独自性を打ち出せる状況にある。景観とかよく言われるが、道路から見た景観はかなり壊れている。シーニックバイウェイという言葉がある。そもそもアメリカから来たものであるが、北海道では積極的に取り組んでおり、モデルコースをつくっている。

浅幹氏(酒田港湾事務所所長)

44歳。うち6年間を海外で過ごし、昨年の8月から酒田に来ている。初めての所に行くと、必ず駅前に行ってみることにしている。酒田駅に行ったが、食事をする所がない、やむなく、ヤマザワに行って、高い枝豆と発泡酒を買って食べた。「だだちゃ豆」だった。それ以来、「だだちゃ豆」に失礼にあたるということで、本物のビールにしている。

外国に行って、自分は日本を知らなさすぎるということに気づいた。地域のことを知ってもらうことが必要で、高校生や中学生を引き込んですればいいのではと思う。

佐藤氏（庄内町）

- ・無いものねだりはしないで、今ある資源を活かすことが大切。
- ・キーワードは「食」。酒田と鶴岡では味付け自体が違う。アル・ケッチャーノの様な名店が他に出てこないか、出来ないものか。
- ・庄内町では、ラーメン23軒を競わせている。お互いが競うことで良くなる。
- ・庄内では造り酒屋が15軒あり、一カ所あたり300人の見学者がくる。特に冬。

川口塾長

・「激戦区」とは、「戦」ではなくお客様に選択されるかどうかの「選」。お客様が激しく選択している。それを店同士の戦いと錯覚している人が多い。だから、おいしい店マップをつくらうとすると、店側が反対することがある。ラーメン屋とお客の戦いである。

酒田に関して

- ・まちは、緩やかな起伏のある所はいい。歩いている人が見える、多く見える。酒田の中通りも同じ様に起伏がある。輝く店が一つか二つ出来てくるとよい。酒田には点ができつつあるが、つながってきかない。
- ・ブロードウェイは碁盤の目状のまちに斜めに入っている道。そこは、人の感情、心が集まってきたところ。「本間家通り」と呼んでいるが、無理をしないで出てくるものが多い。人の想いや心が無いところはだめである。

鶴岡に関して

- ・ディープな鶴岡が入っていた。今回の「まちあるき」には「この町に住んで良かったというポイントの一つを入れてくれと頼んだ。
- ・鶴岡の内川。小樽は坂道の上、夕焼けの頃、張碓トンネルを抜けた一瞬に見える小樽の灯り。そこで小樽を感じる。そういったところを一カ所でいいのでみたい。

まちあるき

- ・物語を発見するもの。熱い想いや物語を知りたい。
- ・旅とは土地のぬくもり、想いをプレゼントするもの。目に見えるものの向こう側を見せるもの。
- ・語れるか。知っていると楽しくなる。
- ・次回のまちあるきに際しては、目に見える向こう側の物語を発見する。勉強してから歩くといいと思う。

後藤副知事

- ・今回の塾はすばらしかった。議論も勉強になり楽しく、次回開催の参考になる。
- ・塾の目的の一つは、他の地域と人を知ること。お互いがお互いのノウハウ、知恵と力を得ることができる。是非、次回以降も他地域のとりくみに参加してほしい。
- ・今回は、庄内の「物語」の様々な芽がでてきた。もっと沢山のの人に広がれば、もっと沢山の芽がみるだろう。この芽を育てて行きたいと思う。
- ・課題は市民の方への広がり。繋げる仕組みが必要である。別府では市民間の広がりがあるが、それは例えばメーリングリストを作って情報を共有するようなことをしている。